

# 平成 27 年度入試の出題の意図・採点総評



北九州市立大学

## 一般選抜

外国語学部	.....	P 1
経済学部	.....	P 4
文学部	.....	P 6
法学部	.....	P11
地域創生学群	.....	P13
国際環境工学部	.....	P14

## 推薦入試

外国語学部	.....	P22
経済学部	.....	P23
文学部	.....	P24
法学部	.....	P26
国際環境工学部	.....	P28

## A0 入試

外国語学部	.....	P36
地域創生学群	.....	P36



# 平成 27 年度入試の出題の意図、採点総評 《一般選抜》

## ◆ 外国語学部 前期日程（英語）

### <出題の意図・ねらい>

試験では高等学校卒業程度の基礎学力とともに英語読解力、英語表現能力を判定する。

問題 1 は長文読解。長文を正確に読めるか問う。英語エッセイを読み、内容を正確に理解できているか（問 1）、指示語が何を指すか正確に読み取れているか（問 2、問 3）を問う。

問題 2 も長文読解。長文を正確に読めるか問う。英語エッセイを読み、内容を正確に理解できているか（問 1）、指示語が何を指すか正確に読み取れているか（問 2、問 3）、英文を正確に日本語にできるか（問 4、問 5）を問う。

問題 3 は和文英訳。与えられた日本語の文を正確に英語に訳す力を問う。

問題 4 も和文英訳。与えられた日本語の文を正確に英語に訳す力を問う。

問題 5 は英作文。与えられた英文のテーマに従って、短いエッセイを英文で書く力を問う。

### <答案の特徴と傾向>

#### 問題 1

長文を正確に読めるか問う。ジェーン・オースティンがどのような家庭環境で彼女の文学的才能を育んだかを扱う英語エッセイを読み、内容を正確に理解できているか問う。

（問 1）は記号で答えさせる問題で比較的よくできていた。

（問 2）は指示語 *it* が具体的に何を指すか英語で答える問題で、全体的に正解率が高かった。本文の一部をそのまま抜き出しただけの情報が不十分な解答が多く見られた。日本語で答えている者もいた。

（問 3）は指示語 *one* が具体的に何を指すか日本語で答える問題で、比較的正解率が高かった。無用なことに言及したり、無理やり言葉をつなぎ合わせた不自然な日本語の解答も見られた。

#### 問題 2

長文を正確に読めるか問う。早期教育における問題点と経験豊かな教育者養成の重要性を論じた英語エッセイを読み、内容を正確に理解できているか問う。

（問 1）は記号で答えさせる問題で比較的よくできていた。

（問 2）は *a gift* が具体的に何を指すか英語で答える問題で、必要な情報をすべて正しく答えられた受験生はそれほど多くなかった。日本語で答えている者もいた。

（問 3）は *the profile* が何を意味するか選択肢から選ぶ問題で、比較的正解率が高かった。

（問 4）は英文を正確に日本語にできるかを問う。文構造を十分理解できないまま和訳した答案が多く見られた。

(問5)も英文を正確に日本語にできるかを問う。指示語 **this** が指す事柄を正確に答えられない答案が多かった。つづりが似ている別の単語と勘違いして和訳している例も散見された。

### 問題3

和文英訳。与えられた日本語の文を正確に英語に訳す力を問う。時制やつづり、冠詞に誤りが多く見られた。

### 問題4

和文英訳。与えられた日本語の文を正確に英語に訳す力を問う。時制の誤りが目立った。単純な英語で表現できた答案ほど高得点につながる傾向がある。

### 問題5

英作文。与えられた英文のテーマに従って、短いエッセイを英文で書く力を問う。”Dreaming”を「夢」という意味でとらえた解答者と、「願望」ととらえた解答者に分かれた。評価する上では英語の流暢性を重視した。

## ◆ 外国語学部英米学科 後期日程 (小論文)

### <出題の意図・ねらい>

#### 問題1

問1 プレゼントを例にとり、日本とアメリカとの文化的な差異について述べている文章である。英文がかなり複雑な箇所もあり、話の流れがきちんと把握できているかどうか、また英語がきちんと読みこなせているかを問う問題である。

問2 筆者のプレゼントの習慣と文化的な違いに対する意見について、自分なりの議論を論理的に展開できるかどうかの評価のポイントとなる。

#### 問題2

“portable electronic devices”が現代の日本では日常生活の一部になっているが、その日常生活に与える “positive and negative effects” というテーマで各自の意見を問う問題である。自分の論を支持する根拠を明確に出せるか、それを論理的に英文として表現できるかがポイントである。

### <答案の特徴と傾向>

#### 問題1

問1 十分に内容を理解できていない答案が多かった。具体的な内容を記述できた答案は高得点を得た。

問2 比較的よく書けていたが、本文をきちんと読めているかどうか、この設問の解答の内容と直結していた。

#### 問題2

具体的な例を挙げ、自分の意見をはっきりと述べた、論理的で良く纏まった英文が高得点を得た。”a”と”the”の誤用、時制の誤り、語彙不足がしばしば見られた。

## ◆ 外国語学部中国学科 後期日程（小論文）

### <出題の意図・ねらい>

橋本努氏『学問の技法』（ちくま新書、2013年）からの出題である。本書は、どう学んだら（学問したら）良いか悩んでいる人に向けて、著者自身の経験に基づき、学問をする意義や学問をするための方法、学びの技術について述べたものである。大きく①知的な生活の送り方、②情報収集、読書や議論の仕方、③文章の作成の仕方という三つの部分から成っている。問題文は、①にあたる章から抜き出したもので、大学で学ぶ（学問する）訓練、それによって身につけられる学ぶ方法が実は企業でも役に立つことが述べられている。外国語とか中国とかに関係のある内容ではないが、これから大学に入って学ぼうという受験生に、大学で学ぶとはどういうことか、大学でどのように学ぶかを考えてほしいと思い、出題した。問1では、文章の内容を的確に把握しまとめられるかどうかを問い、問2では、本文を踏まえた上での自分の考えを論理的に述べられるかどうかを問うた。

### <答案の特徴と傾向>

#### 問1

問題文は比較的内容がとらえやすい文章であり、おおむね内容把握、まとめができていた。しかしポイントとなる文を羅列するだけで論理的にまとめられていない答案もあった。

#### 問2

問題文の踏まえ方は様々であったが、問題文のどこをどう踏まえたかわかりにくい答案もあった。一般的なことや自分の経験を踏まえて述べたものがある一方で、留学やサークル活動などに言及し大学生活を思い描きながら述べたものもあった。全体として、思いついたことをそのまま書き連ねて尻すぼみとなったり強引に結論に持っていったりする答案が多く、しっかりとした構成のもと論理的で説得力のある答案は少なかった。

## ◆ 外国語学部国際関係学科 後期日程（小論文）

### <出題の意図・ねらい>

この試験では、日本の外国人労働者問題に関する2つの資料を取り上げた。資料1は外国人労働者受け入れを前提として日本国内の多文化共生を推進するための方策を論じており、資料2は低賃金労働力としての外国人を受け入れる前に国内ビジネスモデルの転換を模索すべきであると主張している。問1では、筆者の主張を的確に読み取り、それをまとめる文章作成能力を確認することを出題のねらいとした。問2では、2つの文章の主張とその根拠について、自分の考えを明確かつ説得力のある文章で表現することができるか確かめることをねらいとした。

### <答案の特徴と傾向>

問1は、少し長めの資料を指定の字数で要約する問題であった。平易で読みやすい内容であったことから、筆者の意図をある程度理解できている答案が多かった。議論のポイントをバランス良く抑えている解答が少なく、特定のポイントに終始しているものが目立った。また文章の意味が良くわかっていないにもかかわらず

ずそのまま引用しており、自分の言葉による要約ができていない解答が多かった。

問 2 は、外国人労働者受け入れ問題について 2 つの資料が提示した異なる観点を指摘し、それぞれの主張の根拠を資料に即して明確かつ適切な分量で述べることが求められた。答案の大半は質問内容を的確にとらえており、逸脱した回答はほとんどみられなかった。しかし、不要な引用を多用した結果、文章が意味不明となった答案も少なくなかった。資料に出てくる専門用語を繰り返すよりも、内容を理解した上で自分の言葉でまとめ直して書いた方がよい。この他、改行不要の指示の見落とし、文字数不足、誤字・脱字、日本語の表現上の問題が散見された。

## ◆ 経済学部 前期日程（英語・数学）

### 《英語》

#### <出題の意図・ねらい>

##### I、II

基本的な文法の知識と語彙力を有しているか、それらを活用してやや複雑な構文を解釈することが出来るか、さらに文を超えたレベルで文脈を踏まえて英語を理解できているかを見る。

##### III、IV

与えられた日本語の文を適切な表現を用いて文法的に正しい英語に訳すことが出来るかを見る。

#### <答案の特徴と傾向>

##### I

問 5 において、“looked up”と“unlike”が正しく理解できていないことに起因すると思われる不自然な訳出が多く見られた。

##### II

問 3 において、“this”の指示対象が正しく捉えられていない解答が多く見られた。また、“intentional”を“international”と取り違えていると思われる誤答が多かった。

##### III

「相手」「好奇心」が正しく訳出されていない答案が目立った。

##### IV

日本語において統語的な主語が義務的ではないことに起因すると思われるが、主語が適切に訳出されていない答案が多く見られた。

## 《数学》

### <出題の意図・ねらい>

本学の数学入試では、基本的な問題が出題されています。いわゆる難問は出題されません。基本的な定理や公式の理解力と論理的な思考力を試すのがねらいです。単なる暗記力や計算力よりも、問題の分析能力と的確な判断力や工夫する力を見るのがねらいです。また、出題の範囲に十分注意してください。

### <答案の特徴と傾向>

#### 問題 1

群数列についての基本的な知識を問う問題です。(1)(2)は問題文で示された定義にしたがって数列の一般式を求める問いですが、解が問題文より容易に推測できるため、解答は書けていても、定義より導かれていない解答が多くありました。(3)は群の最初の項と最後の項の値が求められれば容易に解ける問題で、解答率も比較的高かったです。(4)は数学的帰納法により示すことができますが、正しい解答は多くはありませんでした。(5)は(4)で示されている 3 以上の奇数番目の群の初めの項が 3 の倍数であることを用いて解くことができますが、解答率が低かったです。

#### 問題 2

微分法や 3 次関数のグラフに関する問題です。(1)と(2)は導関数の意味を理解していれば容易に解くことができ、正答率は高めでした。(3)は異なる 3 点のうちの 1 つは 0 であることから、実質的には 2 次方程式が異なる 2 つの実数解をもち、それらが共に正であるための条件を求める問題でした。異なる 2 つの実数解をもつ条件は導出したものの、共に正であるための条件が欠けている解答を多くみかけました。(4)と(5)は 3 次関数のグラフの概形を正しく把握し、設問通りに図形を描くことができれば、容易に正答することができますが、正答者は多くありませんでした。全体を通じて、単純な計算ミスにより混乱が生じたと思われる誤答も多かったようです。

#### 問題 3

(1)では、中点を求める式が誤っている答案が多くみられました。公式は注意深く正確に適用しましょう。(2)では、直線の傾きから直線 QR を計算する過程で計算ミスが多くみられましたが、直線 QR が原点を通ることを図で確認できれば計算が簡単になります。(3)では、線分 QR が円の直径になっていることに気付けば簡単に求まります。また、(4)は(3)が正確に求まれば答えが得られます。(5)計算が少し煩雑で、正解するのは難しかったようです。公式などを正確に使い、日ごろから計算結果を簡素化する練習をしていれば、問題を解くための展望が開けます。また、図形の性質を使って、計算を簡素化する練習もしておきましょう。

#### 問題 4

計算そのものは単純でしたが、条件の整理に失敗し、的外れになってしまった答案や、条件を整理せずに数え上げ、ミスしてしまった答案が多い問題でした。

(1)はかなり解けていましたが、1 回目の出目は何でも構わないという点を見落としていた答案が一部ありました。(2)も正答率は高かったですが、(1)の結果を無理に使おうとして、計算ミスするケースが散見されました。(3)は、三角比を使うなど、難しく考えすぎる答案が見受けられました。(4)(5)では、台形と長方形に場合分けする答案が多かったですが、場合分けは不要であり、かえってミスの原因となっていました。

## ◆ 経済学部 後期日程（小論文）

### <出題の意図・ねらい>

本年度は、経済発展のプロセスに関する論文を題材にして出題した。戦後の日本ないし近年のアジアは急速な経済発展に成功したことは周知のとおりであり、経済学では、その要因を解明するため様々な研究がなされている。課題文は、その中の1つの有力な説を理解し、自分の考えを展開していくことができるかを問う問題である。

問題（1）は、課題文の中に書かれている人間的発展という重要なキーワードを十分に理解して読んでいるかを問う問題である。問題（2）は、筆者の論理を正確に理解し、それと照らし合わせて、現在において、貧困国が経済発展を達成できない原因はどこにあるのか、今までの歴史や現代社会、新聞やニュースで幅広く学習した知識を活かして論述できるかを問う問題である。

### <答案の特徴と傾向>

問1については、概ね、キーワードを探すことはできていたようだが、みんなが社会的チャンスに分かれ合い、経済が拡大していった点をよく理解していなかった。問2については、質問の意図をよく理解しておらず、自分の意見を論理的にまとめて答える答案が少なかった。

## ◆ 文学部比較文化学科 前期日程（総合問題）

### <出題の意図・ねらい>

#### 問題Ⅰ 英文読解

ジェスチャーなどの非言語的コミュニケーションが、文化によって異なることを記した英文を出題した。文化が異なることによってどのようなコミュニケーションの違いがもたされるかを、具体的な例をおさえながら、理解できているかどうかを確認する設問とした。

- 問1 基本的な英文和訳の能力を問う設問である。‘With much as~’といった英語的な表現を正確に和訳できるかどうかを重視した。
- 問2 穴埋め問題であるが、語彙力を問うだけではなく、文章全体を理解できているかどうかを問う設問とした。
- 問3 下線部の文章についてどのような事例が挙げられているかを説明する設問である。文章の構成を正しく把握できているかどうかを問うている。
- 問4 問1と同様、基本的な英文和訳の能力を問う問題である。下線部の文章は、本文の要約とも言える文章であり、本文全体を理解できているかどうかを確認する問いにもなっている。
- 問5 穴埋め問題であるが、語彙力を問うだけではなく、前後の文章の文脈を理解できているかを問う設問となっている。
- 問6 英文和訳の問題であるが、下線部の前の文章を受けている ‘such’の内容を説明させることで、文章同士のつながりを正しくは把握できているかを問うものとなっている。
- 問7 問1・問4に比べて、レベルの高い英文和訳の能力を問う設問となっている。現在分詞(‘Being knowledgeable’)の訳し方や、‘can go a long way towards ~ing’のイディオムの訳し方などを重視した。



## 問題Ⅱ 英作文

多くの人に馴染みがあるであろう太宰治の短篇を出題し、普段何気なく読んでいるような文章を的確に英訳できる能力を問う設問とした。とりわけ「人一倍」といった日本語的な表現や、主語のない日本語文の英訳が正確にできるかどうかを重視している。

## 問題Ⅲ 現代文（論理的文章）

文芸時評集の中から文学批評の方法に関する文章を選択した。「それぞれの作品の無限にちかい多様性に即応して、次々と新しい工夫かたちをとる」という、定石なき文学批評の方法と、その具体的な実践をおさえることができているかを問う設問とした。

問一 「厳密にはゼロである」理由を説明する問題である。精神分析の治療に関して述べられているが、同じ段落のはじめの方には「たとえば」とあるなど、文学批評と関連付けて理解する必要がある。文学批評と精神分析という一見異なる行為に共通点を見出し、整理することができるかを問うた。

問二 筆者が文学批評を具体的にどのように実践しているかを把握する問題である。本田氏の二つの小説に見出せる一つの大きな特徴を指摘した上で、特に「スペース・セールスマン」のどのような点に筆者は独自性を見出しているかを把握し、自分の言葉で簡潔にまとめることができるかを問うた。問題文全体の流れを把握し、まとめる力が必要となる。

## 問題Ⅳ 現代文（国語表現）

問一 漢字書き取り問題。日常的に用いる漢字を、正確に書くことができるかを問うた。

問二 副詞を用いた作文の問題。高校生までに学ぶ日本語文法の基礎事項が理解できているかどうかにも重視した。

問三 熟語を用いた作文の問題。高校生までの評論等で学ぶ言葉の基礎が理解できているか、さらにそれを具体性をもって説明できるかを問うた。

## <答案の特徴と傾向>

### 問題Ⅰ

問1 問題自体は平易だと思われるが、文頭の **with** 以下の副詞句の日本語訳に苦しめられる答案が目立った。**non-verbal** は「非言語的」が妥当である。

問2 課題文の内容を理解している学生には比較的、解きやすい問題であったようである。誤答としては、イ、エなどがあった。

問3 ボディー・ランゲージの意味が地域ごとに大きく異なる具体例を本文中から読み取り、日本語で説明するという問題であるが、「北アメリカ」を「南アメリカ」、「東アジア」を「西アジア」、「ブルガリア」を「ブラジル」とするなど、基本的な単語の取り違えがかなり多く見られた。また、後半の **shaking one's head** を「握手する」や「頭を一度振る」などと誤訳し、結果的に意味の通らない文になっている解答が意外なほど多かった。

問4 「**straightforward**」の訳に苦勞したのか、満点は少なかったものの、課題文全体の流れを理解している学生は、その理解度に応じた点数を獲得することができていた。

問5 正解率が非常に高い問題であった。

問6 比較的よくできていたが、“**such**”の示す内容をきちんと書けていない答案が散見された。また“**Given**”を接続詞的に訳せていない答案が多かった。

問7 “unspoken message” など、直訳しただけではわかりにくい表現をそのまま訳しているもの、また、語句と語句の並列関係など、文の構造が分かっていないために、意味がよく分からない日本語になってしまっているものが目立った。一度書いた文章を読み直し、意味が通るかどうかを確認することが望ましい。

## 問題II

(1) 「敏感である」は sensitive とすべきところを、綴りを誤って書いた解答が非常に多かった。文頭を小文字で書き始める初歩的な誤りも目についた。「人一倍」は比較級を用いてうまく英語で表現できた答案が多かった。

(2) 基本の時制を過去に設定していない答案が多く見受けられたため、全体として正答が少なかった。また、慣用句である look forward to ~ing を正しく使用できていない答案も目立った。

## 問題III

問一 患者の全容を知ることが大変困難であるという点、また一般的な治療理論が完成に至るということはないという点が最も重要なポイントである。これらの点が書かれている解答は多かったが、それにとどまっておき、さらに詳しく説明している答案は少なかった。詳述するためには、無限に近い多様性に即応しなければならず、定石がないということにおいて批評研究と精神分析が共通点をもつという点を解答に書き加える必要がある。

問二 一般的な現実はどのようなものか、「スペース・セールスマン」ではその一般的な現実がどのようにつくりかえられていると筆者は考えているかについては、多くの受験生がおさえることができていた。しかしながら、筆者が読み取っている、本田氏の二作品に共通する要素をおさえられている答案は少なかった。

## 問題IV

問一 ⑥の「善後策」を「前後策」等と誤って解答しているものが目立った。③⑧⑨の二文字目の偏を間違っているものも多かった。また、つくべきところがついていなかったり、形がゆがんでいたりというような殴り書きのような解答があり、その場合、正解しているか判断が難しく、点数を出すことができなかった。

問二 全体として出来はよかった。が、「めっきり」を類似の語感を持つ言葉と勘違いして用いている解答や「単文」の意味を理解できていないものがあった。日常的な読書等で、語彙力を蓄積してほしい。

問三 「葛藤」についての具体的な説明をもとめたものだが、辞書的な説明で終えてしまっているものや、単に事例のみをあげて解説のないものなど、偏った解答が多かった。

## ◆ 文学部人間関係学科 前期日程（小論文）

### <出題の意図・ねらい>

自分の見える範囲の社会が現在進行形のグローバリゼーションの影響によって、どのような変化を起しているのか、そしてその中で他者化する人間関係について、具体的な想像力をどの程度働かせることができるかを問う問題である。

自らの体験で持つて語るのではなく、自分の身の周りに起こりうる事態を具体的に描き、そこから論理的な考察を進めることを問う内容となっている。

### <答案の特徴と傾向>

全体的に英文章の単語自体はそれ程難しいものではないが、文章の内容そのものの理解がどの程度なされているかで点数の差がついた傾向にある。特に、問1・問2でそれが明確に現れていたように思われる。問3では、「グローバル化という広い社会」は理解できていても、それが「家族という小さい社会」へ変容すると家族関係にどのようなジレンマや影響が出てくるかという具体的な想像力を期待した問題である。日本における外国人家事労働者の受け入れ実施による影響について、肯定的側面として、外国の言語や文化に触れることができるということが述べられた答案があった一方で、他の言語や文化と直面する文化摩擦という否定的側面を挙げた答案も見られた。否定的影響で最も多かったのは、親子が触れ合う時間や場面が少なくなることによる親子関係の希薄さについてであった。具体例は色々と挙げられているものの、記述の仕方が漠然としていた答案も目立った。

## ◆ 文学部比較文化学科 後期日程（小論文）

### <出題の意図・ねらい>

#### 問1

長文を読解する能力と、そこから必要な情報を選び出して文章でまとめる力を問うている。この間に答えるためには、問題文全体を的確に理解している必要がある。問題文の前半に、「どのような作品の場合」にも必要なことを述べた一文があり、また、詩を「真実の姿において体験」するために必要なことも述べられている。後半には、絵画等の造形芸術の場合の例が挙げられ、「異質の文化をもった国土の芸術を鑑賞するため」に必要なことが述べられる。問題文の末尾にも、「これらのことを知りつつ」、その上で必要なことが記されている。問題文全体に散らばるそれらの要素を、的確に理解できていることが、読み手にきちんと伝わるようにまとめる力を求めている。

#### 問2

これまでの体験や経験の中などから、当てはまる適切な事例を選び出し、論理的に文章でまとめる力を問うている。教科書に載る詩や文学作品を、授業を受けたことよって、より深く理解できたという経験は誰もがしていることと思われる。また、芸術が好きな人は、美術館博物館の展示室に掲示されている解説を読んだり、或いは、テレビの美術番組を見たりして、作品の魅力をより深く理解できたという経験をしたこともあるだろう。そのように、これまでの生活の中で、既に、「芸術作品を深く理解するためには理性的理解や知識」が必要であることを体感していることに気付き、そのような経験などを、この問に結び付けて、論理的かつ具体的に論述する力を求めている。

## <答案の特徴と傾向>

### 問1

「どのような芸術作品の場合にも、理性的に理解する段階がなければ、その作品の鑑賞は成り立たない」という点については、大部分の受験生が押さえることが出来ていた。しかしながら、詩（言語芸術）と絵画（造形芸術）の両方にバランス良く触れることのできている解答は少なかった。「これらを知りつつ、それを分析的な知識の末端にとどめるのではなしに、それらの知識をもって体験を立体的に構成できたときに、作品を前にする体験は初めて真の芸術体験に高まる」という点に関しても、言及しているものはごくわずかだった。全体的に、本文の一部にのみ注目したような解答が多かったように思われる。また、感覚的な鑑賞に言及するものや、理性・知性・知識といった言葉の使い分けが曖昧な解答も目立ち、本文の内容に対する理解度が低いのではないかと思われた。

### 問2

経験などを参照しながら、抽象的ではなく、できるだけ具体的に述べられるかが採点のポイントであった。①理性的な理解を得たきっかけ（授業、書籍、テレビ番組など）、②知り得た情報は何か、③またその情報を得たことにより、理解がどのように深まったのかという点を段取りよく論述できている解答は少なかった。

## ◆ 文学部人間関係学科 後期日程（集団面接・グループ討論）

### <面接の意図・ねらい>

後期日程の試験は、数人の受験生による集団討論に基づいて行われる集団面接である。テーマを設定した討論場面において、自分自身の見解をテーマに沿って論理的・独創的に表現できる力、情報提供や意見調整など円滑なコミュニケーションを進める力、集団の中で適切なかたちでリーダーシップを発揮していける力などを見ていきたいと考える。

なお、討論テーマはあくまでも討論のために設定されたもので、それ以上の意図をもつものではない。

### <受験生の特徴と傾向>

活発な意見がなされているような雰囲気はあるが、テーマ文のキーワードだけの意見交換になり、何について問われているのかの意識が討論の中で弱くなりがちであった。意見交換だけではなく、問われていることについて出口を見出すことを意識してもらいたい。そのためには、しっかりとテーマ文（課題文）を読んで内容を理解し、何を議論すべきかをおさえる必要がある。

いま何が議論されているか、議論されている内容がテーマとどのように関連しているかといった視点をもつことや、討論を深める力が期待される。

## ◆ 法学部 前期日程（小論文）

### <出題の意図・ねらい>

#### 【出題文選択の背景】

学校選択制とは、公立の小中学校に関して、子どもや保護者が就学する学校を選択できる制度のことである。従来、市町村内に複数の小学校・中学校がある場合には、学校ごとに学区を定め、居住する学区の学校に就学するのが一般的であった。しかし、2000年代以降、首都圏を中心に学校選択制が採用されるようになり、近年では地方でも採用される例が見られる。

本問は三つの課題文から構成される。【課題文A】行政改革委員会「規制緩和の推進に関する意見（第2次）」（1996年）は、その後の政府の施策の指針となり、全国に学校選択制が広がる契機となったものである。次に、【課題文B】安田洋祐「学校選択制を経済学で考える」エコノミスト 87巻3号（2009年）は、学校選択制によって、子ども・保護者が行きたい学校を選択できるようになり、学校選択を通じた子ども・保護者の声が教育の質の向上をもたらすことを強調するものである。これに対して、【課題文C】藤田英典「学校選択制—格差社会か共生社会か」藤田英典編『誰のための「教育再生」か』（岩波書店・2007年）は、学校選択制によって、家庭の進学準備力や情報収集力の高い子どもが序列上位の学校に入る傾向が強まり、学校の序列化が進行し、格差社会の再生産のメカニズムが強まることに警鐘を鳴らすものである。

受験生は、最初に【課題文A】を読んで、学校選択制導入の背景を理解することが求められる。次に、学校選択制に賛成の立場である【課題文B】と、学校選択制に反対の立場である【課題文C】を読み、両者を要約した上で、自己の見解を述べることが求められる。

現代の日本では、様々な政策論争の背後に「自由競争を通じた効率の向上」を重視するか「公的規制を通じた平等の保障」を重視するかを巡る価値観の対立があるが、学校選択制に関する議論もその例外ではない。それに加えて、学校選択制に関する議論は、公教育の本来の役割に関する考察を抜きにして語ることはできない。その意味で、受験生には、学校選択制という具体的な政策課題の検討を行いながらも、公教育の本来の役割は何かを考えてもらいたい。

#### 【受験生に何を望むのか】

受験生には問題文の要求に応えた答案を作成することが求められる。

第一に、学校選択制に賛成の立場をとる【課題文B】と反対の立場をとる【課題文C】の要旨をまとめることが求められる。その中で、課題文を読解し整理・要約する能力が測られる。第二に、学校選択制に関する受験生自身の見解を論じることが求められる。その中で、課題文で示されたような賛否両論があることを踏まえた上で、自己の見解を論理的・説得的に論述する能力が測られる。

### <答案の特徴と傾向>

設問は、【課題文B】及び【課題文C】を要約したうえで、学校選択制に対する自分の見解を述べることを求めている。多くの答案が要約部分と見解部分を分けて論述していたものの、少数ながら要約部分がなく自己の見解のみを論述した答案があったほか、要約部分と見解部分の字数のバランスを欠いた答案も散見された。

要約部分について、【課題文B】と【課題文C】が立場の異なるものであることを理解していないか、あるいは、それを表現できていない答案が少なからずあった。また、課題文全体の平面的な引用にとどまり、【課題文B】及び【課題文C】の核心部分に関する言及が少ない答案が見られた。その一方で、【課題文B】及び【課題文C】に見られる学校選択制の賛否に関する要素を的確に論述した答案もあった。いずれにせよ、本

問のように課題文を短く要約する場合には、逐文・逐語的に引用するのではなく、文章全体を俯瞰した上で、核心部分を整理・要約することが求められよう。

次に、学校選択制に対する受験生自身の見解を述べる部分では、学校選択制に対する賛成・反対が概ね半分に分かれた。賛成論・反対論ともに論拠から結論に至る筋道が明らかでない答案や、学校選択制というテーマから逸れて格差社会の是非を論じる答案などもあった。その一方で、教育という身近なテーマに関する問題であることもあってか、積極的に自己の見解を論じる答案も多くみられた。その中には、課題文にはない独自の視点から自己の立場を論じるもの、自己の見解と異なる立場に対して適切な論及（反論）を行っているもの、公教育の本来的意義とは何かを論じることで自己の立場に重み付けを与えているもの、などがあつた。

## ◆ 法学部 後期日程（面接）

### <面接の意図とねらい>

法学部では、一般選抜後期日程試験において、面接による選抜試験を実施している。面接を実施している理由は、単にセンター試験の成績のみで入学者を選抜するのではなく、対話形式により社会的問題関心などを問うことにより、幅広い素養を持った学生を選抜するためである。したがって、面接にあたっては、①法学部学生として必要とされる社会に関する基礎的知識と社会的問題関心および論理的思考能力、②プレゼンテーションのやり方やコミュニケーションの能力などを中心として評価している。

なお、限られた時間内での面接であるため、勉学意欲や目的意識、志望理由などについては、昨年度に引き続き独立した質問としてではなく、社会問題についての質問への応答のなかで総合的に評価することとした。

### <受験生の特徴と傾向>

面接試験では2問を出題した。いずれも受験生の社会的問題関心、論理的思考力と表現力などの適性をみるための、社会問題に関する質問である。第1問は「コンビニエンスストアの深夜営業規制」を巡る問題であり、第2問は「環境税」に関する問題である。

面接全体を通じて言えるのは、面接対策が奏功しているためか、質問に対してよどみなく回答ができる受験生が多くみられたことである。また、回答の内容も独創性のある興味深いものが散見された。その一方で、一見すると身近に思えるような問題について、それを社会全体の観点から捉えることができる受験生は少数にとどまっているように思われる。

第1問目の「コンビニエンスストアの深夜営業規制」に関しては、日常生活に関連する問題でもあったことから、多くの受験生は比較的スムーズに回答できていた。その中には、地域による違いを意識した意見、ガソリンスタンドなど他の施設との相互補完性に言及する意見、など様々に興味深い意見もあった。その一方で、受験者本人の生活条件に準拠して「便利である」あるいは「迷惑である」という先入観に捉われた回答も見られた。深夜営業規制に関する賛否は相半ばしたものの、コンビニエンスストアの社会的意義（効用あるいは弊害）を踏まえて論じることができたか否かが得点差につながったように思われる。

第2問目の「環境税」に関しては、難解なテーマではあるものの、高校までに学習する内容であり社会問題に関心のある受験生であれば理解しておくことが望ましい事柄である。実際の面接では、受験生によって環境税の理解の程度には大きく差が開いた。その一方で、環境税の是非に対する問いに関しては、多くの受験生が自分なりの考え方を説明することができていた。その中でも、大半の受験生は賛成の立場から立論し

たが、環境保護の重要性を強調するにとどまらず、京都議定書等の国際的取決めに言及したり、税金によるエコ技術開発を通じた国際貢献などのかたちで日本の環境税が地球規模の射程を持つ環境問題にいかなる影響を持ちうるかを意識した回答ができたかどうかによって得点差が生じたように思われる。

## ◆ 地域創生学群 前期日程（小論文）

### <出題の意図・ねらい>

今回の試験の出題文は、昨年度の一般選抜の小論文試験と同様に、地域の再生と創造（地域創生）を担う人材に求められる能力（スキル）に関連した文章の中から、次の3点を念頭に置きながら選定しました。1点目は、地域創生やまちづくりを考える上で重要な人材の在り方に関連した文章であること、2点目は、地域創生学群において学生に育んでほしいと考える能力に関連した文章であること、3点目は一般選抜であることを考慮して、一般的、かつ、平易な文章であることです。複数の候補を検討した結果、平田オリザ（2012年）『わかりあえないことから ～コミュニケーション能力とは何か～』講談社、の当該箇所が、上記選定基準に鑑みて最も適当であると判断し、出題文として選定した次第です。

今回の出題文では、国際関係上求められるコミュニケーション能力はどのようなものか考えることがテーマとなっています。一見、国際関係上求められるコミュニケーション能力ということで、地域と関係の内容に思えるかもしれませんが、そこに示されている内容は、地域創生を担う人材として求められるコミュニケーション能力そのものです。この内容を咀嚼し、地域創生を担う人材としてどのようなコミュニケーション能力が必要と考えられるのかを、地域創生学群の各コースに関係なく必要な能力であると考えました。

設問では、上記の出題文の内容を、地域創生を担う人材として必要とされるコミュニケーション能力という視点で、筆者の考えをまとめるということを求めました。また、当然ですが、論理的思考能力や説得力は解答文全体を通じて評価されることとなります。

### <答案の特徴と傾向>

出題文の内容を地域の再生と創造を担う人材として求められるコミュニケーション能力と読み変えようと努力している、わかりあえないことを前提にして共有できる部分を見つけ、それを広げていくようなコミュニケーション能力が求められている、以上2点を主な評価点としました。

答案の傾向としては、出題文を地域創生という観点で読み変えることができず、国際関係上必要なコミュニケーション能力として説明しているものが見られました。また、答案作成時の重要なポイントとしては出題文の後半部分が中心になってくるのですが、前半部分だけを安易にまとめるだけの答案も見受けられました。

一方で、設題のポイントをしっかりと押さえ、論理的展開も踏まえたうえで、簡潔に内容をまとめ、下書きをきっちりとした上で丁寧にかかれた、大変素晴らしい答案もありました。もちろん、このような答案には高い得点がつきました。

最後に、例年のことですが、受験生の意見を求めている設問であるにも関わらず、自分の主張を述べた答案、自分の地域の活動の紹介など、出題文とはほとんど関係のない地域創生に関する事柄について述べている答案もありました。受験生には、本学地域創生学群の小論文の傾向をきちんと踏まえて、入学試験に臨んでいただきたいです。

## <面接のポイント>

地域創生学群では、実際の地域に出て様々な活動を行う実習を重視しています。今年の集団面接では、特に単に他者と関わる力だけではなく、他者と協働して資料を読み解き、ともに考える力があるのかについても評価を行うこととしました。

## ◆ 国際環境工学部 前期日程（理科・数学）

### 理科（物理・化学）

#### <出題の意図・ねらい>

##### 【第1問～第3問 物理】

- 第1問 力のつりあいについて基礎的な知識を有し、それを用いて物体に作用する力を正しくとらえることができるかを問う。
- 第2問 気体分子の速さや質量などの微視的な量と巨視的な量である気体の圧力との関係、さらに気体の内部エネルギーについての基礎的理解を問う。
- 第3問 電流、電圧に関する基本的な知識およびそれらの測定機器の基本的な使用方法についての理解を問う。

##### 【第4問～第6問 化学】

- 第4問 硫酸銅の電気分解を題材に、酸化還元反応や気体の性質について問う問題である。物質量の考え方を理解していること、化学反応式を正しく書けることを確認している。
- 第5問 化学反応の速度と平衡について問う問題である。反応速度および化学平衡の概念や、化学反応と物質量の関係を正しく理解していることを確認するとともに、数値計算能力を評価している。
- 第6問 有機化合物および有機化学反応の基本的な知識と、正答に至るまでの論理的な思考力を求める問題である。

#### <答案の特徴と傾向>

##### 【第1問～第3問 物理】

- 第1問 全問正解の答案も多数見られたが、力の分解およびつり合いの条件を正しく理解しておらず全問不正解の答案も見られた。全体的な傾向としては、前半の物体に対し鉛直方向に力が作用する場合の問題は、物理以外に初歩的な数学の知識で解けるため、比較的正答率が高かった。しかし後半の、物体に対し垂直に力が作用する場合は、力の分解により多少複雑な計算をする必要があり、計算ミスが多く見られた。
- 第2問 教科書の内容に沿った基礎的な問題であったが、全問正解の受験者は少なかった。気体分子1個の運動を1 molの気体分子に拡張する（ス）および（セ）での間違いが多かったためである。しかし後半の設問（ソ）および（タ）の正解者は多かった。式の丸覚えではなく、式の導出の過程も理解して欲しい。
- 第3問 正解率は低かった。測定器の原理を知り、測定値が何を示しているのかを正確に理解することは科学の基本なので、しっかり勉強してほしい。



## 【第4問～第6問 化学】

### 第4問

- 問1・問2 電気分解の陽極および陰極で起こる反応を問う問題である。基本的な問題であり、正解率は高かった。陽極で起こる反応と陰極で起こる反応を逆に書いている答案が少数あったが、反応を単純に記憶するのではなく、それぞれの電極で起こるのは酸化反応なのか、それとも還元反応なのかを理解していれば、そのような間違いは避けられるはずである。
- 問3 問2の解答である2つの反応式から、陽極および陰極で生成する物質の物質量の関係は容易にわかるはずである。概ねよくできていたが、「物質量」ということばの意味を正しく理解していないと思われる答案も見られた。化学用語の意味・定義は正しく理解して欲しい。
- 問4 与えられている気体定数と問3で求めた物質量から、気体の状態方程式を使って体積を求める問題である。問題文をよく読んでいないのか、計算過程を示していない答案も見られ、有効数字に関しては全く考慮していない答案が非常に多く見られた。
- 問5 電気分解で流れる電流と電気量、反応した物質の物質量の関係について問う問題である。ファラデーの電気分解の法則は理解していても、単純な計算ミスをしている答案が多く、正解に至っている答案は少数であった。正解の10倍や10分の1を解としているなど、慎重に計算していれば避けられそうなミスが多かった。
- 問6 電気分解では電極自身が反応する場合があるが、ここではそのような場合の電極反応を問うた。問2同様、教科書にそのまま載っているような典型的な問題であり、正答率も比較的高かった。ごく少数ではあるが、陽極と陰極に同じ反応を書いている答案が見られた。どちらかだけでも正解できればという考えかもしれないが、理解不足を公言しているようなものであり、根本的に間違っている。

### 第5問

- 問1 物質の化学式、量論係数、可逆反応を示す両方向の矢印などを正確に表記できることがポイントであり、この問題の正答率は高かった。
- 問2 概ねよくできていた。物質のモル濃度および比例定数（反応速度定数）を用いて、化学反応の速度を数式で表現する能力を問う問題であり、定数、化学式の添字や次数、濃度の表記法に正確性を期す必要がある。
- 問3 この問題も正答率は高かった。平衡定数の定義をきちんと理解し、正確に式で表現できるかどうかポイントであり、反応物、生成物のいずれの濃度積が分母、分子になるのかに注意する必要がある。
- 問4 非常に正答率が低かった。平衡状態では正反応と逆反応の速度が等しいという点を指摘してそれを数式で表現できなければ、正解にたどりつかない。
- 問5 不完全な解答が大多数であった。反応で消費される（あるいは生成する）物質の量を変数として物質収支をとること、反応器の体積を仮定した濃度を用いて平衡定数の式に代入すること、得られた数式を正しく解き、不適な解を除外すること、有効数字を含む数値や単位が適切であること、これらすべてをひとつひとつ記述して完全な解答となる。

### 第6問

- 問1 芳香族化合物に関する極めて基礎的な問題であり、人類のために役立つ有機化合物の典型的な例を扱った問題である。半数以上は問題を正しく理解した上で指示どおり正確に構造式が書けていた。
- 問2・問3 芳香族化合物の性質を使って、混合物を分離するための方法を問うた。官能基の性質をよく理解し、ひとつひとつ論理的に考えていけば難しい問題ではないが、化学を暗記科目と捉えている受験生にとっては難問であったかもしれない。

問4 沸点の差を利用して蒸留により分離するのが最も簡単であるが、それ以外にも分離可能な方法はある。もちろんそれらの解答も正解である。

## 数 学

### <出題の意図・ねらい>

#### 第1問

数学Ⅰ、数学Aに関する基礎学力を確認する。二次関数、三角比、場合の数、根号を含む式の計算、確率・期待値について出題している。

#### 第2問

数学Ⅱ、数学Bに関する基礎学力を確認する。高次方程式、円の方程式、三角関数、対数関数、数列について出題している。

#### 第3問

積分法に関する問題。積分を用いた面積・体積の求め方についての理解と応用力を確認している。

#### 第4問

空間のベクトルに関する問題。ベクトルの合成、線分や球のベクトル方程式、ベクトルの内積と直交について理解できているか確認している。

### <答案の特徴・傾向>

#### 第1問

(1)の正答率はやや低かった。最大値、最小値の一方のみの正解者が多かった。(2)は余弦定理、正弦定理を使えば簡単に解答できる。半径の正解者は、面積も求めることができていた。(3)の正答率は低かった。基本対称式の問題である(4)や基本的な確率問題である(5)の正答率は比較的高かった。

#### 第2問

基本的な学力を問う問題であったが、全問正解者は少なかった。特に、(1)の正答率が低かった。なお、(4)の正答率が高かったものの、最大値と最小値を逆に記述しているものが見られた。

#### 第3問

円柱を斜めに切断して切り出した立体の体積を、積分法を用いて求める問題。

(1) 切り出した立体の断面積(長方形)を求める問題。7割以上の受験者が完答し、残りの受験者に関しては、不完全な解答によって減点されるケースが多く見られた。減点の内容は、単純な計算ミス、辺の長さの勘違い、など不注意によるミスが多かった。

(2) (1)で算出した断面積を所定の積分区間で積分し体積を求める問題である。受験者の得点結果は全体的に低く、完答者は1割未満となった。多くの受験生で、定積分の計算ミスで失点しているケースや、変数の置換が正しくできていないケースが多く見られた。

#### 第4問

(1) 正答率は30%を超える程度で低かった。BC上の点Pのベクトル表現(ベクトルBPをベクトルBCのk倍で表す)を知っていれば、内積の直交条件から変数1個の方程式を簡単に導くことができるが、この方

法を使ったのは正解者でも半数のみであった。

(2) 最も正答率が高く 50%程度あったが、半数以上は余弦定理を用いての解答であった。

(3) 正答率は 20%前後で、(1)の正解者の 60%程度であった。球の中心の位置ベクトルの絶対値を球の半径と比較すれば簡単に判別できるが、この計算過程が示せない解答が多かった。

(4) 正答率 2%以下で予想通り少なかった。(1)と同様に AB 上の点 H のベクトル表現ができれば、 $|AQ|=|HQ|$  から 1 変数の方程式が導出できるが、(3)までの正解者でも白紙のままが多かった。

## ◆ 国際環境工学部 後期日程 (数学)

■機械システム工学科 (第 3 問必修、第 4 問選択 A、B の中から 1 問選択)

■情報メディア工学科 (選択)

■環境生命工学科 (選択)

### <出題の意図・ねらい>

第 1 問 (第 4 問 選択 A)

二次方程式、二次不等式、組み合わせ、三角形の面積、及び、確率に関する基礎的な知識と演算能力を問う問題である。いずれも基礎能力の確認を狙っており、正確かつ迅速に解答することを期待した。

第 2 問 (第 4 問 選択 B)

図形と方程式に関する設問である。高度な知識や発想を問う問題ではなく、円や直線、軌跡に関する基本的な知識と論理的な思考力を確認する問題である。

第 3 問 (第 3 問 必須)

対数関数に関連して、定積分を使って面積を計算させ、その最小値を問い、微分積分の基礎知識と計算力を確認する問題である。

### <答案の特徴と傾向>

第 1 問 (第 4 問 選択 A)

基本的な知識と計算力を問う問題のため、いずれも正解率が高かった。

第 2 問 (第 4 問 選択 B)

円と直線の共有点や円の接線、点と直線の距離など基礎事項の理解度は比較的高かったが、(3)の軌跡を正しく求められた答案は予想よりも少なかった。また、単純な計算ミスや円と直線の位置関係を正しくイメージできていないと思われる答案も見られた。

第 3 問 (第 3 問 必須)

小問(1)では、 $t$  をパラメータ、 $x$  を変数として定積分を使って領域  $S$  の面積を計算し、これを  $f(t)$  とすればよい。この  $x$  と  $t$  の役割を整理することができず、正しく答えられない答案がたいへん多かった。また、途中で計算を誤った答案も多かった。

小問(2)では、(1)で求めた関数  $f(t)$  の与えられた  $t$  の範囲での最小値を求めればよい。(1)で  $f(t)$  を正しく求めることができた答案では、正しく最小値を求めることができた答案の割合が比較的高かった。

全体としてこの問題で正答の答えは少なかった。微分、積分はもちろん正しく計算できることが基本であるが、その意味を理解して正しく応用できる力を身につける必要がある。

## ◆ 国際環境工学部 後期日程（物理）

■機械システム工学科（第1問、第2問）

■情報メディア工学科（選択）

■環境生命工学科（選択）

### <出題の意図・ねらい>

#### 第1問

放物運動および運動・位置エネルギーについての基礎的な知識を有し、それを用いて物体の運動について正しく計算することができるかを問う。

#### 第2問

理想気体の状態方程式と状態変化、および熱力学の第1法則の理解を問う。

#### 第3問

抵抗、コイル、コンデンサーの直流回路における振る舞いに関する基礎的な知識と理解を問う。

### <答案の特徴と傾向>

#### 第1問

前半の放物運動における基礎的な問題は正答率が高かったが、使用できる記号が制限された場合の正答率が低かった。また運動エネルギーの問題の正答率が高かった。しかし、はねかえりの問題において、はねかえってきた物体の落下位置(x座標の位置)を問うたのだが、落下位置の壁からの距離を答えている学生が多く見られた。

#### 第2問

問1は、理想気体の状態方程式、気体の内部エネルギー、熱力学の第1法則に関する基礎的な問題であり、この正解率が高かった。問2も同様の問題であるが、体積を変数としている点が問1と異なる。計算力を多少必要とするためか、問1よりも正解率は低く、特に設問(テ)の正解者は非常に少なかった。

#### 第3問

前半の正答率が高かったが、後半は低かった。公式を覚えるだけでなく、複雑な状況に的確に適用する応用力が必要である。

## ◆ 国際環境工学部 後期日程（化学）

- エネルギー循環化学科
- 環境生命工学科（選択）

### <出題の意図・ねらい>

#### 第1問

酸性雨における化学を題材として、化学反応、酸・塩基、濃度の算出などの基礎を問う内容である。

- 問1 化学反応の基礎知識を問う問題である。
- 問2 化学平衡における平衡式の導出と計算についての基礎的な問題である。
- 問3 濃度算出についての基礎的な問題である。
- 問4 酸-塩基反応における化学反応式の導出を問う問題である。
- 問5 無機化合物の反応における基礎知識と化学的な量の算出を問う問題である。
- 問6 中和滴定における濃度算出の基礎的な問題である。
- 問7 無機化合物に関する基礎知識を用いて、起こる化学現象を推測する問題である。

#### 第2問

鉄の製造過程を題材として、化学反応、結合名や物質収支などの基礎を問う問題である。

- 問1 鉄の製造過程における酸化・還元反応や得られる金属の名称を問う問題である。
- 問2 上記の基本的な化学反応式を問う問題である。
- 問3 上記の過程での固体物質内に作用する結合名を問う問題である。
- 問4 上記の製造過程の化学反応式から物質収支を計算する問題である。

#### 第3問

アルコールに関連する有機化学の基礎知識を問う内容である。

- 問1 アルコールを完全燃焼した場合に発生する二酸化炭素と水の質量を求める基礎的な計算問題である。
- 問2 アルコールの全ての異性体とその物質名を答える問題である。
- 問3 アルコールの異性体のうち光学異性体を答える問題である。
- 問4 アルコールが分子内で脱水反応した場合の生成物を答える問題である。
- 問5 問4の生成物とその物質名を答える問題である。

### <答案の特徴と傾向>

#### 第1問

特に計算式の導出と解答への展開において、基本的な式をそのまま使うことはできるが、起きている化学反応・現象に合わせた式の変形や式の組合せが必要な問題での正答率は低かった。知識の蓄積はそれなりにできるが、知識の応用については対応力が不十分であることが見て取れる。

#### 第2問

問1～3に関しては、正解率は比較的高かったが、問4の計算問題の正解率はやや低かった。以上から、知識の記憶は一定レベルであるが、知識を理解して数値化する能力がやや不十分であることが伺える。

### 第3問

- 問1 基礎的な問題であり、正答率は高かった。
- 問2 4種類の異性体の構造式の正答率は高かったが、物質名の正答率は低かった。
- 問3 正答率は高かった。
- 問4 問2の物質名が正確に解答できていないため、物質名の正答率は低かった。
- 問5 生成物の構造式の正答率は高かったが、物質名の正答率は低かった。

## ◆ 国際環境工学部 後期日程（生物）

### ■ 環境生命工学科（選択）

#### <出題の意図・ねらい>

##### 第1問

細胞膜の構造や機能、どのようなタンパク質が細胞膜上で働いているかについて理解度を問う問題である。

##### 第2問

動物及び植物における環境情報の知覚および応答の仕組み、特に光、音、重力さらには、化学物質に対する受容とそれに対する応答反応の仕組みについての理解度を問う問題である。

##### 第3問

生物の個体群の成長曲線や密度効果、群れなどについての基本的な知識と理解度を問う問題である。

#### <答案の特徴と傾向>

##### 第1問

細胞膜の構造および機能に関する問題であった。細胞膜を介した水やイオンなどの輸送現象や細胞の応答性に関する正答率は高かったが、細胞間接着や受容体に関しては不十分であった。また、細胞膜の構造やチャネルを図解する問題では、図示はよくできている一方で、不十分な解説や誤った理解をしている解答が多かった。

##### 第2問

動物がどのような感覚器官を利用してどのような環境の情報を知覚するかについて、適切な語彙を選択する問題は、おおむね正答率が高かった。一方、植物ホルモンの関与により進行する光屈性や離層形成についての説明など、植物が生活観の中で、環境からの刺激に応答して、どのように成長の速度や形態を変化させるのかについて文章で説明する設問では、不十分な解答が多く見受けられた。

##### 第3問

- 問1 正解率は高かったが、Bの文章で個体群密度の高い場合と低い場合を間違えた場合、その後の空欄を続けて間違える例がかなりみられた。
- 問2 個体群の成長曲線について理解を求めたが、正解率は高かった。ただし、正確に理解しているケースとあいまいに理解しているケースに分かれた。

問3 密度効果の理解度を問う問題であったが、産卵形態とその有利性まで理解できている受験生は少なかった。

問4 群れの利益について問う問題であったが、正解率は高かった。

## ◆ 国際環境工学部 後期日程（面接）

### ■ 建築デザイン学科

#### <面接の意図・ねらい>

グループ面接および個別面接・口頭試問を行った。グループ面接は受験生を5名程度のグループに分けて行った。

- ・建築業界における新技術の導入と伝統技術の保護に関する問題
- ・他の受験生の意見

について質問し、回答を求めた。個別面接・口頭試問では、

- ・自己PRおよびその内容
- ・暑い地域と寒い地域の住宅の違い
- ・青色発光ダイオードの開発

について質問し、回答を求めた。これらの質問を通じて受験生の思考力および意欲などを確認した。

#### <受験生の特徴と傾向>

##### グループ面接

積極的な新技術の導入を支持する意見と伝統技術の保護を支持する意見が、ほぼ5:5に分かれた。ディスカッションを進めるうち、新技術と伝統技術の両立を提案する受験生が増える傾向にあった。

##### 個別面接・口頭試問

暑い地域と寒い地域の住宅の違いについては、風通し、断熱および屋根に関連する回答をした受験生が多かった。青色発光ダイオードの開発については、省エネおよび三原色に関連する回答をした受験生が多かった。

# 平成 27 年度入試の出題の意図、採点総評 《推薦入試》

## ◆ 外国語学部英米学科 推薦入試（全国：面接）（地域：小論文）

### I 全国推薦

#### <出題の意図・ねらい>

英語で自分の考えや意見を表現することができ、平易なコミュニケーション活動を行なうことができる。

#### <答案の特徴>

コミュニケーションをとろうという積極性を持ち、難しい質問にも食い下がる熱意を見せた。期待に十分に答える受験生であったと評価できる。

### II 地域推薦

#### <出題の意図・ねらい>

問題文は、エレベーターの発達にまつわる考察を扱った文章である。

問 1 は、キーワードを的確に捉えて、理解した内容を簡潔にまとめる問題である。

問 2 と問 3 は、英文和訳の問題である。英文を読むために必要な構文に関する理解を問うている。

問 4 は、質問に従いながら、自分なりの議論を論理的に構成する問題である。

#### <答案の特徴と傾向>

##### 問 1

ほとんどの受験生が問題文の内容を理解できていた。ただし、内容を纏める際の取捨選択の仕方で理解度の差が見られた。

##### 問 2

単語の意味が分かっているか、2 回出てくる **that** を文法的に理解しているか、といった基本的なことを問う問題である。出来は悪くなかった。

##### 問 3

**the** 比較級～, **the** 比較級～をきちんと訳せるか、**matter** の意味が分かっているのかといった基本的なことを問う問題である。きちんと訳せるかどうかで、差がはっきり出ている。

##### 問 4

受験生が、日頃の経験に基づいて、エレベーターのメリットとデメリットを英語で考察することを求めている問題である。テキストの考え方や言い回しをそのままコピーするのではなく、自分で考えて自分の意見を表現出来るかどうかで、大きな差がついた。



## ◆ 外国語学部国際関係学科 推薦入試（小論文）

### <出題の意図・ねらい>

問題文は、日本の第二公用語とすることを含め、グローバル化した社会において英語教育をより積極的に行うことを推奨する英文である。それに対して資料は、国家の公用語は、その言語を母語とする集団の権利を守るためのものであることから、日本での英語公用語化論に異を唱える日本語の文章である。問1では、英文による筆者の主張を正確に読み取れているかどうかを確認する。問2では、問題文と資料の両方を参考にして、今日の日本の英語教育についての受験生の考えを述べさせたものである。

### <答案の特徴と傾向>

#### 問1

英語による文章を指定の字数で要約する問題であった。英文は一部がやや難解であったが、議論の主旨はおおむね理解できたようであった。しかし、基本的な単語力が不足していたようで、文と文の繋がりを正確に把握できなかったり、さらには全体の主旨と矛盾する記述があったりするなど、不十分な内容になっている解答が多かった。

#### 問2

多くの答案が英語教育について自分の考えをよく展開していたが、そのなかには、問題にある「民間企業や大学等で英語を共通言語とすること」と「国家の公用語とすること」の違いについて正しく理解し、十分に説明していないものが少なくなかった。冒頭に自分の考えを提示した後、自分が理想とする英語教育について述べる前に、共通語と公用語についての問題文と資料の見解を要領よくまとめることが大切であったが、ここができるかどうかで良い答案とそうでないものとの評価が分かれた。

## ◆ 経済学部 推薦入試（小論文）

### <出題の意図・ねらい>

世界の最重要課題となっている地球環境問題について、資料の内容と主旨を正しく判読して整理するとともに、それを踏まえて、自分の見解を論理的に展開できる学力を問う意図で出題した。

### <答案の特徴と傾向>

#### 問1と問2

資料の内容を読み取って要約する設問であったので、答案の傾向としては、うまくまとめているものが多かった。しかし、一部については誤字・脱字があり、減点の対象となった。また、設問1では、問いにかかわる資料の文章構造を正しく理解できていないものが、散見された。

#### 問3

三通りの傾向が主に見うけられた。すなわち、資料の内容をただ繰り返しているのみの答案、資料の内容の中のいずれかの方策（たとえば植林など）に注目して、独自の知識を加えつつ強調している答案、資料の内容を踏まえつつも独自の知識を加えるとともに、極めて特徴ある自分なりの方策（電気自動車を有料で貸

し出す制度など)を提案している答案、の三通りである。

その他、国民の環境に対する意識の向上を図るべきだ、など具体性が欠けた観念的な答案が多々見られた。

## ◆ 文学部比較文化学科 推薦入試 (小論文)

### <出題の意図・ねらい>

#### 問題 I

問題文は、現代の日本社会、さらには家庭内における娯楽として確実に浸透してきたコンピューターゲームの歴史を辿りつつ、それが日本社会に及ぼす功罪両面を論じたもの。更に問題文の中で筆者は、コンピューターゲームが日本文化の重要な一部になるに及んで顕在化してきた重要な課題についても問題提起をしている。

- 問1 下線部の英文の意味を理解した上で、その理由が述べられている箇所を的確に把握し、その部分を日本語で要約することを求めている。英文の理解と日本語の文章力・構成力を問うことがねらいである。
- 問2 1970年代以前(A)、1970年代～1983年(B)、1983年以降(C)、それぞれの時代におけるコンピューターゲームの状況が書かれている箇所を的確に見つけ出し、その部分を日本語で要約することを求めている。問1と同様、英語の読解力、及び、日本語の文章力・構成力を問うことがねらいである。
- 問3 コンピューターゲームの良い面(A)と悪い面(B)、それぞれが書かれている箇所を的確に把握し、英語の読解力、及び、日本語の文章力・構成力を問うことがねらいである。
- 問4 筆者の意見が述べられている箇所を的確に把握し、その意見を理解し、それを踏まえた上でコンピューターゲームとどのようにつき合っていくべきなのかについて、自分の考えを英文で述べることを求めている。英文の構成力や論理性はもちろん、自分の意見を組み立てるために必要な発想力をも問うことがねらいである。

#### 問題 II

もはや古典的ともいうべきサイドの「オリエンタリズム」の概念であるが、今日のグローバル化が進む社会のあり方やイスラム教社会との軋轢あつれきにおいて再び注目を集めている。今回の問題文は日本人の文化人類学者の視点から、本来の中東地域とは異なるアジアやアフリカ地域をも含む異文化へのアプローチに共通する問題として取り上げられたものである。

問1は、問題文を読んで文中の語句の意味と筆者の考えを読み取り、それを自分の言葉でまとめる力があるかどうかを見る問題である。

問2は、文中に示された以外の「異文化」へのアプローチの事例を示しうる想像力を持っているか、また自らの意見を論理的な文章で表現できるかを見る問題である。

### <答案の特徴と傾向>

#### 問題 I

問1 比較的良好できていたが、“500 million” および“Compared to ~”の一文が正確に訳せていない答案が目立った。

問2 (A) 平均的には 50 パーセントほどの出来で、「ゲーム内容が単純で、具体的には……である」という箇所の要点理解は 80 パーセント以上のものができていた。しかし、「コンピューターゲームは 1948 年頃から出回っている」「現代の生き生きした映像や複雑な物語性が有るゲームではなく単純なものだった」「こうしたゲームはコンピューター所有者が少なく人気はでなかった」といった 3 箇所全ての要点理解が正しくできているものは極めて少なかった。

(B) 第 2 パラグラフの中の **It was not until ... that ....** の正しい理解ができていない解答が目立った。①1970 年代のゲームセンターの登場によりコンピューターゲームが日本の文化の一部になったこと、②若者たちのゲームセンター通い、③ゲーム製作者も男女ともに楽しめるゲームを作製したこと、④コンピューターゲームが現代の日本社会で定着していること。以上の 4 つを踏まえて解答されているのかを採点基準にした。日本語の的確な表現力を重点的に採点した。

(C) ①ファミコンの登場により、ゲームをする場所がゲームセンターから家庭に移ったこと、②経済市場で多くの操作卓が売れたこと、③遊び場での会話の内容が変わったこと、④グループ分け等が操作卓の所有に左右されること、⑤ゲームが家族の娯楽の中心となったこと、の 5 点に着目をして採点を行った。④は **peer** の解釈が難しかったのか、正答はほとんど見られなかった。また、**focus** を「中心」と理解できていた学生は 25% ぐらいであった。

問3 どの箇所が指示されているのかについては、ほとんどの答案が正しく把握できていた。

(A) 良い面については、多くの答案が英文を正しく理解していたようである。ただし、親だけではなく、子供にとっても利点があること、すなわち利点は親子双方に存在することまで理解できている答案は少なかった。

(B) **physical** や **virtual** の意味を理解できず、同じ物理空間を共有しているのに、異なる仮想空間に存在しているという状態を日本語で正しく表現できている答案は少なかった。

問4 「筆者の意見を踏まえたうえで」「自分の意見を述べる」という、設問の基本的な枠組みに対応していない解答が目立った。また、動詞の過去形が誤っている、助動詞の基本的な用法が間違っている、自動詞と他動詞の区別ができていない答案も目立った。基本的な文法に関する知識の不足が総じて目立った。

## 問題Ⅱ

問1 「オリエンタリズム」という言葉の本来の意味と筆者が考えるそれとの違いについて説明が、抽象的な言葉を用いすぎているために、具体性を欠く曖昧な内容になってしまっているものが多かった。また、説明というよりは、ほとんど本文の抜き出しに近い文章となってしまうため、全体として意味が繋がっていない解答が目立った。

また、サイド著『オリエンタリズム』発刊以来の「オリエンタリズム」の意味（本来の意味）を、筆者が考えるそれに含めてしまっている解答も目立った。

問2 そもそも問いが、具体的な事例を挙げて対策を答えることを求めていると理解できていない解答が多かった。「異文化に対する無知と無理解の上に立って初めから自文化優位で、異文化を見下すような態度」の具体例を挙げず、「中国蔑視」や「部落差別」など抽象的な例を挙げて論じるものが多かった。また、「本文以外の」とあるのに本文の例をなぞってしまう解答もあった。具体例を挙げている場合でも、「インドの人が手づかみで食事をするのを差別的にみる」、「アメリカで靴を履いたまま家に入るのを汚いと思う」など、似たような例が目立つ。特別なことでなくとも、身近な例を丁寧に説明で

きるとよかったと思う。論の結論部分、異文化を見下すような態度を回避するための具体的な策の提示についても、「学校教育を通して異文化理解を深める」といった抽象的な解答がほとんどであった。未熟であっても独自の考察が光る解答がほしい。

## ◆ 文学部人間関係学科 推薦入試（小論文）

### <出題の意図・ねらい>

この英文は、Jリーグの試合で浦和レッズのファンが掲げた“Japanese only”の横断幕をきっかけにした、日本における racism（人種差別）問題に関する英字新聞（JAPAN TIMES）のコラムである。やや難解な英文であるが、日本に帰化した外国人である著者が、日本社会に深く根ざしている人種差別の実態を描き出し、日本でそれが許容されてきた理由にも触れながら、今後、日本が国際社会の中で果たしていくべき役割について、明確に指摘したコラムである。

問1から問3では、英文から著者の主張をしっかりと読み取っていく力を評価していく。

問4では、著者の見解をふまえて、日本の人種差別の現状（例 ヘイトスピーチ デモの横行）などにも触れながら、日本が国際社会の信頼を獲得していく上で、人種差別の撤廃に向けて取り組んでいく課題や方法について、説得力のある論を展開できる力を評価していく。

### <答案の特徴と傾向>

設問1から3について、これらの設問に的確に答えられるところまで英文を読みこなせていた学生は少なかった。

特に問1の Why should the Urawa banner be “construed” any differently を反語としてとらえて正確に解答できた受験生がほとんどいなかったことには驚かされた。

設問4について、

設問4では、筆者の見解を受けて論の展開をしていくことを求めているが、筆者の最終的な結論を肯定的にしる、批判的にしる、きっちりと踏まえたかたちで論旨を展開している小論文は多くはなかった。やはり、英文の読解の不十分さが、妥当性のある小論文の展開に大きく影響していたように思われる。

## ◆ 法学部 推薦入試（小論文）

### <出題の意図・ねらい>

#### （1）出題文選択の背景

出題文の出典は、加藤秀治郎『日本の選挙』（中公新書、2003年）である。

本書は、主に小選挙区制と比例代表制という選挙制度を支える思想を紹介している。日本においては、各選挙制度がどのような民主主義の理念から主張されているかという、理念の問題があまり顧みられていない。その結果、技術的観点や各党の損得ばかりが幅をきかせ、政治的妥協などから中間的な制度（混合型の選挙制度）が提案され、支持を集めていることを筆者は問題視している。

本書では、小選挙区制論者として W.バジヨット、J.シュンペーターの選挙制度論が紹介されている。それぞれ、議院内閣制の根本的機能との関係、権力者を選挙を通じて平和的に除くという機能の観点から小選挙

区制を支持している。また、筆者は比例代表制論者としてJ.S.ミル、H.ケルゼンの議論を紹介している。両者は、数に応じた代表及び権力の配分、多数派と少数派の妥協を引き出す仕組みという点から比例代表制を支持している。

このような選挙制度論議を再考することは、現在の日本において意義のあるものである。最高裁判所は2010年に実施された参議院議員選挙について、違憲状態との判断を下し、国会にその解消を促している。それを受けて、参議院には選挙制度協議会が設置され、議論が進められている。しかし、議員とはいかなる存在であるのか、権力をいかに配分すべきなのか等の民主主義観、他の制度との関連性の中で機能する制度とは何か（制度的補完性）という視点があり見受けられない。こうした政治状況を踏まえ、受験生にこれからの選挙制度のあり方、民主主義のあり方を考えてもらうことにしたのである。

## （２） 受験生に何を望むのか

第一に、文章の読解力・理解力が求められる。出題文にある2つの選挙制度を支える考え方について、4人の論者の記述を十分理解したうえで、ポイントをまとめることが必要である。

第二に、小選挙区制に対する賛否について、受験生自身の考えを論理的・説得的に述べるのが求められる。是非、受験生にはこれまでの社会科学習の知識を前提としつつ、2つの選挙制度を支えるそれぞれの理念を批判的に検討し、自由に見解を展開して欲しい。

## <答案の特徴と傾向>

設問は、①2つの選挙制度（小選挙区制と比例代表制）を支える考え方の要約、②小選挙区制に対する賛否について、受験生自身の見解を述べることを求めるものである。

①についてみると、出題文では比例代表制論と小選挙区制論が交互に紹介されていた。要約部分では、筆者の見解ではなく、主に4人の論者の要点をまとめることが受験生に求められていた。ただし、「筆者の見解は…」等、設問の意図が汲み取れていない答案が一部に見られた。また、要約が前半部分（J.S.ミル、W.バジョット）に偏り、後半部分（H.ケルゼン、J.シュンペーター）のまとめが不十分な答案も散見された。筆者の見解を要約することを求める小論文は多いけれども、設問の形式はそれに限られない。設問文を慎重に検討し、出題文を熟読した上で、全体を要約する練習を重ねてもらいたい。

次に、②小選挙区制への賛否を述べる部分では、賛否がそれぞれ半数程度であった。具体的には、ミルの数に比例した代表の選出、権力の配分を基礎に意見を展開するものがやや多かった。また、バジョットの指摘する安定的な多数派の必要性、シュンペーターの見解（制度の本質を有権者が政府を追放する機能に求める）を参考に自らの議論を展開した答案も散見された。

ただし、小選挙区制への賛否という意図から逸れた答案もあった。設問は小選挙区制がどのような理由から肯定されるのか、もしくは否定されるのかを尋ねたものである。それに対して、小選挙区制に対する評価と理由づけから離れ、具体的な制度設計や対策のみを提示するものがあった。また、設問では「2つの選挙制度を支える考え方を要約した上で」となっているのに対して、要約部分がないままに、答案の冒頭に賛否を明示し、議論を展開するものも見受けられた。他に、要約部分と見解部分の字数のバランスを欠いたもの等、設問自体に適切に対応していない解答も一部に見られた。

全体としては、①出題文に対する読解の正確さが②の設問への解答の質を左右し、得点の分布を左右する傾向が見られた。

## ◆ 国際環境工学部エネルギー循環化学科 推薦入試（総合問題・面接）

### 総合問題

#### <出題の意図とねらい>

##### 第1問

濃度、気体の反応、気体の体積および電気分解についての基本的な計算問題を通して、これらの基本的な知識などを理解していることを確認するとともに、環境に対する基礎知識に基づく応用力や日本語読解力を確認する。

##### 第2問

問1 元素の周期表と各元素を含む化合物についての基本的な知識を有しているかを問う問題である。

問2 化学平衡の平衡定数の計算について、基本的な知識を問う問題である。

#### <答案の特徴と傾向>

##### 第1問

問1 濃度についての基本的な問題であるが、不正解の解答が多かった。

問2 化学反応式の間違いは少なかったが、各物質量の計算で間違っている解答が多かった。

問3 概ね正答であったが、気体の状態方程式を覚えていても代入と計算の過程で間違える解答が目立った。

問4 生成物は正解していても計算で間違える解答が多かった。

##### 第2問

問1の知識問題は概ね正答していたが、問2は正答率が低かった。

### 面接

#### <面接内容>

本学へ進学を希望する動機および本学での学習意欲に加え、現段階における化学の基礎知識（酸-塩基、酸化-還元など）に関する質問を行った。

#### <受験生の特徴と傾向>

ほとんどの学生が太陽電池や新エネルギーなど、エネルギー問題に対する興味があり、次いで水質や物質循環について興味がある学生が多く、志望動機については明瞭に解答する学生が多くみられた。

一方、極基本的な化学の質問に対して、正解できた学生は極めて少なく、高等学校から提出された成績書に記載の成績が極めて良い学生であっても全く解答できない学生がほとんどであった。

前者については、事前に練習等ができるため対策が立てやすいが、後者に関しては、そのような対策ができなかったことが原因であると考えられる。しかし、質問の難易度と受験者が興味を抱いている分野から想定すれば、正解できてしかるべきであり、受験者の基礎学力が低いと言わざるを得ない。

## ◆ 国際環境工学部機械システム工学科 推薦入試（総合問題・面接）

### 総合問題

#### <出題の意図とねらい>

##### 第1問（数学）

- 問1 放物線と直線の位置関係についての基本的な知識を問う問題である。
- 問2 組み合わせの数と確率についての基本的な知識を問う問題である。
- 問3 2次方程式の判別式および解と係数の関係についての基本的な知識を問う問題である。
- 問4 空間ベクトルの位置関係についての基本的な知識とベクトルの基本的な計算能力を問う問題である。
- 問5 対数の性質についての基本的な知識と対数を含む不等式の基本的な計算能力を問う問題である。
- いずれの問題も高校数学の基本的な知識と計算能力の確認を意図したものであり、正確かつ迅速に解答することを期待した。

##### 第2問（数学）

数学Ⅱの範囲から出題で、図形と方程式、微分法と積分法の基礎知識を問う。

##### 第3問（物理）

- 問1 落体の運動の基礎を確認する問題とした。
- 問2 気柱の振動の基礎を確認する問題とした。
- 問3 コンデンサーの基礎を確認する問題とした。

#### <答案の特徴と傾向>

##### 第1問（数学）

- 問1 放物線と直線が接するための条件を判別式を用いて求めるところがポイントとなるが、正答率は比較的高かったものの、判別式の計算を誤っていると思われる答案が散見された。
- 問2 組合せの数と確率についての基本的な知識があれば容易に解答可能な問題であり、正答率は比較的高かった。
- 問3 判別式および解と係数の関係を用いて、題意を満たす連立不等式を導出するところがポイントとなるが、全ての不等式の共通範囲を正しく求められていない答案が多く見られた。
- 問4 空間ベクトルの位置関係についての基本的な知識を問う問題であるが、途中で計算を誤っていると思われる答案が多く見られ、正答率は比較的低かった。
- 問5 対数を含む不等式の基本的な計算能力を問う問題であるが、真数条件を見落としている答案が多く見られ、正答率は比較的低かった。

##### 第2問（数学）

不注意によるミス、計算ミスが多かった。問4は正解者がいなかった。線分ABが辺の直径であることに気づいていないからだと考えられる。問5の面積を公式のような式を使って求めている答案があった。

### 第3問 (物理)

- 問1 自由落下と放物運動について問う問題であり、問題ア～ウの正答率は概ね高かったが、その他の正答率は低かった。
- 問2 管内の気柱の振動に関する基礎的な問題であるが、正答率の高い受験生とそうでない受験生とに分かれた。
- 問3 コンデンサーの直列・並列接続について等問題であるが、問題サ以外の正答率は低かった。

## 面接

### <面接内容と意図>

受験生14名に対し、1人8分程度の個人面談を実施した。

- (1) 志望理由に関する質問
- (2) 物理と数学に関する基礎的な質問
- (3) 卒業後の進路に関する質問

以上、3点について質問し、就学意欲やコミュニケーション能力などを確認した。

### <受験生の特徴と傾向>

志望理由については、「ものづくり」、「環境問題」を例に挙げて機械工学分野や教員の研究分野などに興味をもっていることなどを述べる受験生が多かった。物理と数学に関する基礎的な質問については、ほとんどの受験生が回答することはできていたが、論理的に説明する能力が高い受験生とそうでない受験生との差は明らかであった。卒業後の進路については、自分の将来について具体的に考えている受験生は少なかった。

## ◆ 国際環境工学部情報メディア工学科 推薦入試 (総合問題・面接)

## 総合問題

### <出題の意図とねらい>

#### 第1問 (数学)

- 問1 放物線と直線の位置関係についての基本的な知識を問う問題である。
- 問2 組み合わせの数と確率についての基本的な知識を問う問題である。
- 問3 2次方程式の判別式および解と係数の関係についての基本的な知識を問う問題である。
- 問4 空間ベクトルの位置関係についての基本的な知識とベクトルの基本的な計算能力を問う問題である。
- 問5 対数の性質についての基本的な知識と対数を含む不等式の基本的な計算能力を問う問題である。
- いずれの問題も高校数学の基本的な知識と計算能力の確認を意図したものであり、正確かつ迅速に解答することを期待した。

#### 第2問 (数学)

数学Ⅱの範囲から出題で、図形と方程式、微分法と積分法の基礎知識を問う。



### 第3問 (物理)

- 問1 落体の運動の基礎を確認する問題とした。
- 問2 気柱の振動の基礎を確認する問題とした。
- 問3 コンデンサーの基礎を確認する問題とした。

### <答案の特徴と傾向>

#### 第1問 (数学)

- 問1 放物線と直線が接するための条件を判別式を用いて求めるところがポイントとなるが、正答率は比較的高かったものの、判別式の計算を誤っていると思われる答案が散見された。
- 問2 組合せの数と確率についての基本的な知識があれば容易に解答可能な問題であり、正答率は比較的高かった。
- 問3 判別式および解と係数の関係を用いて、題意を満たす連立不等式を導出するところがポイントとなるが、全ての不等式の共通範囲を正しく求められていない答案が多く見られた。
- 問4 空間ベクトルの位置関係についての基本的な知識を問う問題であるが、途中で計算を誤っていると思われる答案が多く見られ、正答率は比較的低かった。
- 問5 対数を含む不等式の基本的な計算能力を問う問題であるが、真数条件を見落としている答案が多く見られ、正答率は比較的低かった。

#### 第2問 (数学)

不注意によるミス、計算ミスが多かった。問4は正解者がいなかった。線分 AB が辺の直径であることに気づいていないからだと考えられる。問5の面積を公式のような式を使って求めている答案があった。

#### 第3問 (物理)

- 問1 自由落下と放物運動について問う問題であり、問題ア～ウの正答率は概ね高かったが、その他の正答率は低かった。
- 問2 管内の気柱の振動に関する基礎的な問題であるが、正答率の高い受験生とそうでない受験生とに分かれた。
- 問3 コンデンサーの直列・並列接続について等問題であるが、問題サ以外の正答率は低かった。

## 面接

### <面接内容と意図>

- (1) 面接では、受験生の本学科を志望する動機や将来の進路などについて質問し、学科の教育内容に対する理解と就学意欲を確認した。
- (2) 口頭試問では、基礎学力を確認する数学の基本問題とした。また、必要に応じてヒントを与え、総合問題で確認できない受験生のもつ本来の実力と問題を解決する思考能力を引き出そうとした。

### <受験生の特徴と傾向>

- (1) 志望動機については、明確に答えた受験生が多かった。将来の進路については、具体的なビジョンでない回答があった。また、学科の教育内容については、事前に調べて準備したような受験生が多かった。

- (2) 口頭試問については、解法を思い出して正しい結果を導いた受験生と、論理的な思考でない公式を暗記しているだけの受験生に分かれ、得点差がやや大きかった。

## ◆ 国際環境工学部建築デザイン学科 推薦入試（総合問題・面接）

### 総合問題

#### <出題の意図とねらい>

##### 第1問（数学）

- 問1 放物線と直線の位置関係についての基本的な知識を問う問題である。
- 問2 組み合わせの数と確率についての基本的な知識を問う問題である。
- 問3 2次方程式の判別式および解と係数の関係についての基本的な知識を問う問題である。
- 問4 空間ベクトルの位置関係についての基本的な知識とベクトルの基本的な計算能力を問う問題である。
- 問5 対数の性質についての基本的な知識と対数を含む不等式の基本的な計算能力を問う問題である。
- いずれの問題も高校数学の基本的な知識と計算能力の確認を意図したものであり、正確かつ迅速に解答することを期待した。

##### 第2問（物理）

- 問1 落体の運動の基礎を確認する問題とした。
- 問2 気柱の振動の基礎を確認する問題とした。

##### 第3問（造形）

- 問1 建築のデザインを行う上で基礎的な素養として必要な立体的な空間の認識力・想像力、三次的な表現力、スケッチによる描写力等の総合的な造形力を見る。
- 問2 与えられたテーマに対して的確に題意を捉え、自らの見解を的確に述べているかを問う問題である。特に、想像力、発想力、論理的思考力、文章表現力を見る。

#### <答案の特徴と傾向>

##### 第1問（数学）

- 問1 放物線と直線が接するための条件を判別式を用いて求めるところがポイントとなるが、正答立は比較的高かったものの、判別式の計算を誤っていると思われる答案が散見された。
- 問2 組合せの数と確率についての基本的な知識があれば容易に解答可能な問題であり、正答率は比較的高かった。
- 問3 判別式および解と係数の関係を用いて、題意を満たす連立不等式を導出するところがポイントとなるが、全ての不等式の共通範囲を正しく求められていない答案が多く見られた。
- 問4 空間ベクトルの位置関係についての基本的な知識を問う問題であるが、途中で計算を誤っていると思われる答案が多く見られ、正答率は比較的低かった。
- 問5 対数を含む不等式の基本的な計算能力を問う問題であるが、真数条件を見落としている答案が多く見られ、正答率は比較的低かった。

## 第2問（物理）

- 問1 自由落下と放物運動について問う問題であり、問題ア～ウの正答率は概ね高かったが、その他の正答率は低かった。
- 問2 管内の気柱の振動に関する基礎的な問題であるが、正答率の高い受験生とそうでない受験生とに分かれた。

## 第3問（造形）

- 問1 写真の建物がどのような立体であるかを想像し、異なった角度から描き出すことによって、立体的な空間の認識力、想像力、スケッチ力等を見た。異なる角度からの描写に関しては、ある程度、立体感覚があることが伺える答案は多かったが、携帯の概形、プロポーションがとらえきれないものも多かった。素材感の表現が できているものは少なかった。
- 問2 写真に写っている建物に設置されている4つの曲がっている板の形態から、これらの板はどのような役割があるかを想像し、説明することによって、想像力、発想力、理論的思考力、文章表現力を見た。回答のなかには、形態とテクスチャーから創意工夫のある回答を試みた事例もみられたが、日本語としての文章表現に問題のある回答もみられた。

## 面接

### <面接内容>

10分程度の個別面接を行った。

- ・志望動機および高校生活の充実度・実績
- ・建築にかかわり深い経験あるいは建築に役立つと思った経験
- ・本学科の教育目的・内容に対する理解
- ・「建築物」と「橋」の共通点と違い
- ・海外に留学することや海外で働くことに対する関心
- ・本人の長所の確認

に関する質問をし、回答を求めた。

### <受験生の特徴と傾向>

- ・質問に対して論理的に回答できた受験生と、できなかった受験生がいた。
- ・学科の特徴に関する質問に対して、ほとんどの受験生が事前に良く調べており、本学科で学びたいという意欲が強く感じられた。
- ・ほとんどの受験生が、事前に想定したであろう質問に対して流暢に回答した。一方、予想外の質問に対しては解答に窮した受験生が目立った。しかしながら、何人かの受験生は予想外の質問に対しても論理的な回答を示した。
- ・多くの受験生が、回答の随所に有名建築家や有名建築物を取り上げて具体的な説明を行った。建築の予備知識を持って面接に挑んだことがうかがえる。

## ◆ 国際環境工学部環境生命工学科 推薦入試（総合問題・面接）

### 総合問題

（第1問 必須）

（第2問 A、B、C から1題選択）

#### <出題の意図とねらい>

##### 第1問

濃度、気体の反応、気体の体積および電気分解についての基本的な計算問題を通して、これらの基本的な知識などを理解していることを確認するとともに、環境に対する基礎知識に基づく応用力や日本語読解力を確認する。

##### 第2A問（物理）

問1 落体の運動の基礎を確認する問題とした。

問2 気柱の振動の基礎を確認する問題とした。

##### 第2B問（生物）

問1 DNA の構造や原核生物・真核生物における転写・翻訳の特徴、遺伝子組み換え技術に関する理解といった、分子生物学に関する知識・理解を問う問題であった。

問2 自然免疫・獲得免疫といった、免疫系の基本的な知識・理解を問う問題であった。

##### 第2C問（化学）

問1 元素の周期表と各元素を含む化合物についての基本的な知識を有しているかを問う問題である。

問2 化学平衡の平衡定数の計算について、基本的な知識を問う問題である。

#### <答案の特徴と傾向>

##### 第1問

問1 濃度についての基本的な問題であるが、不正解の解答が多かった。

問2 化学反応式の間違いは少なかったが、各物質量の計算で間違っている解答が多かった。

問3 概ね正答であったが、気体の状態方程式を覚えていても代入と計算の過程で間違える解答が目立った。

問4 生成物は正解していても計算で間違える解答が多かった。

##### 第2A問（物理）

問1 自由落下と放物運動について問う問題であり、問題ア～ウの正答率は概ね高かったが、その他の正答率は低かった。

問2 管内の気柱の振動に関する基礎的な問題であるが、正答率の高い受験生とそうでない受験生とに分かれた。

## 第2B問（生物）

問1 塩基の割合などは良く理解していた。一方で、原核生物と真核生物の転写・翻訳の違いや遺伝子組み換え技術については理解が不十分な学生もいた。分子生物学の知識は生命科学の基礎であり、十分に理解しておくことが望まれる。

問2 全体的によく理解していた。

## 第2C問（化学）

問1の知識問題は概ね正答していたが、問2は正答率が低かった。

## 面接

### <面接形式と内容>

志望動機、印象的な実験や現象などについての説明、将来の進路などについて質問を行い、それに対する受け答えから意欲・コミュニケーション能力、学力、理解力について評価を行った。

### <受験生の特徴と傾向>

皆、面接官の質問に耳を傾け、それについてしっかりと説明しており、強い意欲と熱心さが伝わってきた。

## 平成 27 年度入試の出題の意図、採点総評 《AO入試》

### ◆ 外国語学部英米学科 AO入試

#### <出題の意図・ねらい>

- 1、英文読解力と講義の聴解力を見る問題。世界地図の方位の問題を扱った英文はやや難易度が高いが、その分、講義を良く聴いて内容理解に努めているかが評価のポイントである。
- 2、模擬授業担当教員の説明を頭に置きながら英文を読み、設問に正確に対応した解答を英文で論述する問題である。
- 3、模擬授業担当教員の説明を正しく聴き取り、その上で、自分の考えを論理的に述べることが出来るかどうかを見る問題。語学力を超えた総合力を判断する問題である。

#### <答案の特徴と傾向>

- 1、論旨の明快な文章のため、ほぼ文意を正しくとらえた文章が多かった。ただ、精緻な読みが不十分な文章が多かったのが残念であった。講義の内容を盛りこもうとして、かえって本文から遠ざかった答案も若干見られた。
- 2、完答できた答案は意外に少なかった。模擬授業担当教員の説明を正しく理解して英文を読み、設問に対応した解答をすることが高得点につながった。逆に、設問とずれた解答をした場合は当然点数が非常に低くなった。
- 3、英文の出来は概してよかった。答案の中には、問題にきちんと対応したものが見受けられる一方で、「地図」とか「グローバルゼーション」とかについて問題とはかけ離れた論述をする解答も見受けられた。

#### <二次試験面接のポイント>

一次試験において英語の読解力および論述力を見ているので、二次試験では、口頭で意見を述べる力を見ることと、今後英米学科で学習していく上での適性を判断することがポイントとなったが、受験者はいずれも高い能力と適性を示していた。

### ◆ 地域創生学群 AO入試

#### <出題の意図・ねらい>

地域創生学群における今年度のAO入試では、一次選抜において模擬授業を聴講して作成するレポート課題を行い、二次選抜では集団面接と個別面接を行いました。

#### <答案の特徴と傾向>

一次選抜における模擬授業では、障害者スポーツのこれからの在り方について、まずは講師自らの体験から障害者スポーツの魅力について紹介しました。次にパラリンピックの歴史的経過と、日本の中学・高校における体育系の部活動が抱えている課題点を整理し、地域における障害者スポーツの拠点づくりによってさらに障害者スポーツの振興を図るとともに、将来はオリンピックとパラリンピックが同じ名称の下で開催

される方向性を提起しました。この内容は、地域の再生と創造を目指す地域創生学群として、障害者スポーツをどのように考えていけばよいかを示した内容であり、今年度の模擬授業の内容としてふさわしいものであると考え、実施をいたしました。

レポート課題では、講義内容を通して講師が伝えたかったことをまとめるというものでした。答案の傾向としては、講師の伝えたかった内容を丁寧にまとめることができている答案が多く見られました。しかし、設題の意図をよく理解せず、受験生の自己の体験や感想を記述した答案も見られました。このような答案については、評価を低くしました。もちろん、文字数が極端に少ない、誤字脱字が多いレポートについても、同様に減点対象としました。

### <集団面接>

二次選抜では、集団面接と個別面接を実施しました。

集団面接では、高校生として総合学習に取り組むという設定のもと、地域住民にインタビューした20の「声」の中から地域の課題を発見し、高校生として課題にどのように取り組めるのかを考えるという課題でした。地域創生学群での実習を中心とした学習プロセスをコンパクトにした課題に、取り組んでいただいたと言えます。ですので、地域創生学群に入学してから積極的に授業や実習に取り組み、地域の課題を考え、取り組みを考えるというプロセスを通して、チームで課題に取り組めるか、コミュニケーション能力は十分に持っているかという点を主に評価しました。

### <個人面接>

個別面接は、集団面接のふりかえりと志望動機について質問をしました。集団面接のふりかえりでは、自己の体験から学ぶということが出来る力を持っているのか、その可能性はありそうかということの評価をしました。二つ目の志望動機については、地域創生学群への入学を希望する意欲を確認することを通して、学ぶ意欲がどれくらい高いのかを評価しました。特に志望動機については、自分の言葉で問題意識や学習への意欲を語る事ができた受験生については、高い評価をしました。